

# 世紀転換期スウェーデン労働運動における日常生活

—1890年頃から1920年頃までのエスキルストーナの事例を中心に—

石原 俊時

## 1. はじめに

労働者階級の形成は、自己が他の諸社会階級と異なるという意識を持つことと共に、自分たち労働者の間に何らかの独自の社会関係やそれを基盤とした文化（労働者文化）を作り出すことをともなっていたと考えられる。それ故、そのような社会関係を見ることは、労働者階級の形成過程の特質を探る上で重要な作業となるであろう。個人が自発的団体に参加することで送ることとなる日常生活を団体生活（föreningsliv）と呼ぶが、労働運動の団体生活は、そうした労働者階級が作り出した社会関係を代表するものであると思われる。そこで本稿では、スウェーデンの労働運動（政治運動である社会民主党をはじめ、労働組合運動、協同組合運動などからなる社会民主主義労働運動）の団体生活が、具体的にどのようなもので如何なる性格を持っていたのかを検討してみたい。

ところで、スウェーデンの労働者階級の形成過程に関して注目すべきなのは、社会民主党や労働組合運動が「国民運動（folkrörelse）」の一つに数えられていることである。スウェーデンの労働運動は、世紀転換期に他の代表的な「国民運動」である禁酒運動や自由教会運動とメンバーを重複させつつ、様々な形で協力しあい、スウェーデンの民主化を担っていったのである。労働者階級は、このような労働者階級と中間層、社会民主主義と自由主義の交錯の中で形成されていった<sup>1)</sup>。それ故、これらの労働運動の「国民運動」としての展開は、成立した労働者階級の性格に大きな影響を与えたと思われるのである。

近年、スウェーデンでも労働者文化の研究が盛んとなり、その中で歴史学や民族学を中心に

---

1) こうした労働者階級と中間層、社会民主主義と自由主義の交錯の視角の重要性ならびに中間層及び下層中間層の概念については、拙稿「19世紀スウェーデン社会と労働組合運動」『歴史学研究』第626号、1991年を参照。また、本稿では、このような中間層が担い手となって生成・展開した文化を市民文化と呼ぶこととする。ただし、下層中間層には、手工業者によく見られたように、伝統的民衆文化を継承する側面が存在し、本稿で扱う労働者階級の場合のみならず、この階層における文化的交錯の状況を検討すべきであることは勿論のことである。しかし、本稿ではこの問題を正面から論ずることはできないので、別の機会に検討することとした。

労働運動の団体生活についての研究も進展してきている。しかしスウェーデン独自の状況としては、「国民運動」研究の一環としての研究がそれをリードしてきたことが挙げられる。そうした研究を代表するのが、ストックホルム大学を中心にして1970年代末から80年代半ばにかけて行われた民族学の研究プロジェクト「『国民運動』の文化環境 (kulturmiljö)」である<sup>2)</sup>。

この研究プロジェクトは、1960年代半ばから10年以上にわたって行われたウプサラ大学における歴史学の「国民運動」の研究プロジェクトを、民族学の立場から継承しようとするものであった。即ち、ウプサラ大学のプロジェクトは、地域研究を積み重ねて、その担い手は如何なる階層であったかを解明し、その地域における政治的動員の分析から、この時期のスウェーデンにおける社会的・政治的諸変化に果たした「国民運動」の役割を明らかにしようとするものであった。これに対し、この民族学のプロジェクトは、「国民運動」における具体的な日常生活の有り様を問題にしたのである。というのも、このプロジェクトの推進者であるヘルスポングによれば、人々がこれらの運動に参加したのは、抽象的なイデオロギーよりもむしろ、団体生活で得られる社会的帰属意識のためであったと考えられたのである。それ故このプロジェクトは、「国民運動」がどのような新しい文化環境、即ち、団体生活を形成したのかを明らかにすることを通じて、ウプサラ大学の研究プロジェクトで得られた「国民運動」の歴史像をより具体的により豊かにすることを目指したといえよう<sup>2)</sup>。

また、このプロジェクトは、旧来の「国民運動」の歴史学、政治学研究が「市民の学校」としての「国民運動」への関心から、その集会でメンバーが自己の意見を表明しあい、組織を運営していったことや教育活動を行いメンバーの資質の向上に努めてきたことにもっぱら注目してきたのに対し、様々な娯楽活動の存在を重視し、団体生活全体を視野に収めようとした意義も持つ<sup>3)</sup>。

本稿では、このような研究の進展を踏まえ、労働運動の団体生活とは如何なるものであったのかを、労働運動の「国民運動」としての展開が、それにどのような影響を与えたのかという視点から見ることとする。そして、具体的には、スウェーデン中部の工業都市エスキルストゥーナ (Eskilstuna) の特に金属・機械工業の労働者(以下では一括して金属・機械労働者と呼ぶこととする)の例を中心に検討してみたい。エスキルストゥーナは、金属・機械工業の中心

2) ウプサラ大学のプロジェクトについては、拙稿「世紀転換期スウェーデンにおける禁酒運動の展開」岡田与好編『政治経済改革への途』、木鐸社 1991年、136頁注(7)を参照。この民族学のプロジェクトのウプサラ大学のプロジェクトに対する位置づけについては、M. Hellspong, "Perspektiv på folkrörelserna," i: *Rig.* 1979 を見よ。このプロジェクトの中で、30余りの論文(殆どが未公刊)と2つの博士論文が生まれ、中間報告として、Dens., "Folkrörelserna som arena för socialt umgänge", i: *Historielärarnas förenings årsskrift 1987-1988* が出され、総括として、Dens., *Korset, fanan och fotbollen*, Stockholm 1991 が公刊された。

3) そうした旧来の研究を代表するものとして、H. Johansson, *Folkrörelserna och det demokratiska statskicket i Sverige*, Stockholm 1952, s.196-206 を参照。

4) この金属・機械労働者は、以下の拙稿で述べた労働者の分類によれば、工場熟練労働者に属す。

地であり、労働運動の中核を金属・機械労働者が担っていた<sup>4)</sup>。

こうしたエスキルストーナの金属・機械労働者の団体生活については、ヘルスポング等のプロジェクトの成果の1つであるエリクソンの研究がある<sup>5)</sup>。しかし、これは極く短いものであり、しかも職場レベルの組織（後に述べる職場クラブ）のみを対象としており、地域には様々なレベルの労働運動の組織が存在することから言えば、甚だ不十分なのである。そこで、このような様々なレベルの運動組織の団体史やプロトコルを利用して、多面的に展開する労働運動の団体生活の具体的像により立体的に接近してみることにする。

以上のように労働運動の団体生活の実態を概観し、「国民運動」として労働運動が展開したことがそれにどのような影響を与えたのかを検討することによって、スウェーデンの労働者階級の形成過程及び労働運動の歴史的特質を解明する手掛かりを得ることが本稿の課題となる。

## 2. 地域における労働運動の組織構造

そこでまず、具体的に団体生活を見る前に、エスキルストーナの金属・機械労働者を中心とした地域の労働運動の組織構造を見ておくことにする。

エスキルストーナにおいて、金属・機械工業の労働組合は、1890年のダールグレン (C.W. Dahlgren) 工場でのストライキを契機として初めて設立された。同年5月に成立したエスキルストーナ鉄・金属労働者組合 (Eskilstuna Järn- och Metallarbetareförening) である。当初は、500人余りの金属・機械工業の様々な労働者からなっていたが、まもなく主に職種別に8つの労働組合に分裂し、各々が中央組織である鉄・金属労連 (Svenska Järn- och Metallarbetareförbundet) の支部 (avdelning) として活動してゆくこととなる<sup>6)</sup>。

しかし、1896年にはこの地域の8つの支部を統括する地域統括局 (platsstyrelse) が設けられると共に、1899年からは各職場に職場クラブ (verkstadsklubb) が設立され始める。この職場クラブは、職種に関わらず職場のすべての労連のメンバーが参加し、職場の労働者の組合への参加を促進するために考えられた組織であったが、設立されるとまもなく職場で使用者に対

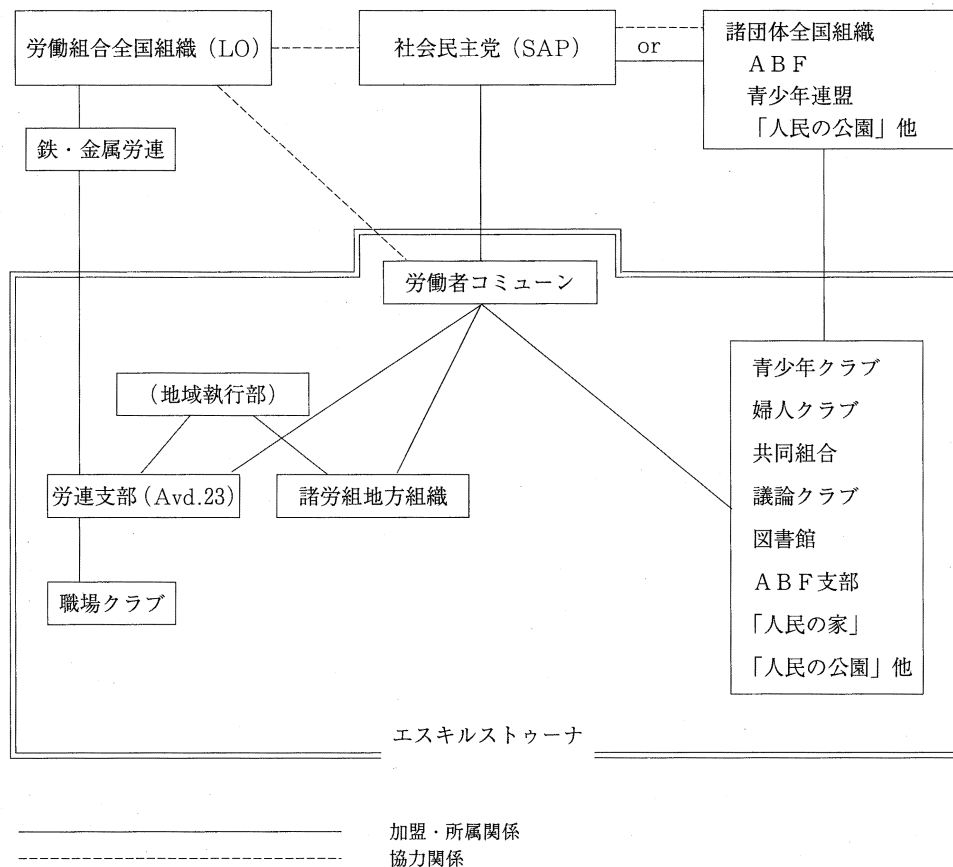
---

す。拙稿「スウェーデンにおける労働者階級の形成をめぐる(上)」『立教経済学研究』第48巻、第2号、1994年、146、151-153頁。それ故、エスキルストーナの労働運動の団体生活は、そうした特定の種類の労働者の性格にも規定されていると考えられる。本稿では、エスキルストーナの事例を通じてスウェーデン全体の労働運動の団体生活について論じようと思うが、そこには必ずこうした限界があることは、予め留意されたい。

5) A.Eriksson, "Tre verkstadsklubbar i Eskilstuna," i: *Sörmlandsbygden* 1978/79.

6) 初期の鉄・金属労連においては、職種毎の組織に分かれる傾向があったことが指摘されている。その時には、職種毎の組合 (specialförening) に分かれ、それぞれが支部をなす場合と、支部の下で職種毎の部局 (sektion) をなす場合があった。J.Lindgren, *Svenska metallindustriarbetareförbundets historia*. Del I, Stockholm 1938, s. 321-332.

図-1 今世紀初頭のエスキlstウーナにおける労働運動の組織構造



して労働組合を代表する存在となり、賃金運動をはじめ職場での様々な活動を担っていった。このように上と下の両方から職種間の統合が進み、ついに1910年には8つの支部が合併して支部 (Avdelning 23) となり、役目を終えた地域統括局は1914年に廃止されることとなる。こうして鉄・金属労連においては、職場クラブ、支部 (Avd.23)、労連という三層からなる組織構造が定着してゆく<sup>7)</sup>。

一方、地域の労働運動を統括する組織も形成されていった。その端緒は、成立してまもない鉄・金属労組をはじめ、それ以前に1880年代半ば以降に設立されていた鑄造工、すず板・板金工、製靴工、塗装工などの労働組合の代表が集まって1890年に結成された地域執行部 (lokalstyrelse) である。これは労組間の活動の連絡や調整を目的とした組織であった。そして1893年には、この組織を受け継いで、労働者コミュニオン (arbetarekommun) が成立する。この組織は、地域の労働組合のみならず政治団体も参加して、ストライキ活動や政治活動など労働者

7) Ibid., s. 454-461.

に関連する共通な問題を検討し実践してゆく協力組織であった。そしてこの組織は、1897年に正式に社会民主党に加盟し、その地域支部としても機能するようになる。こうしてエスキルストゥーナでは、労働組合活動と政治活動が一体となった労働運動の組織形態が形成されていった。そして地域には、金属・機械労働者から見れば、職場クラブ、労連支部 (Avd.23)、労働者コミュニオンといった3つのレベルの組織が存在することとなったのである<sup>8)</sup>。

このような労働組合や政党組織の他に、婦人クラブ、青少年クラブ (ungdomsklubb)、協同組合、議論クラブ、図書館、新聞社、集会所である「人民の家 (Folkets hus)」, 「人民の公園 (Folkets park)」などの組織が存在し、それには、地域の様々な職業の労働者のみではなく、他の階層の人々も参加していた。例えば、青少年クラブには、学校教師や新聞編集者などがメンバーとなっていた。これらの組織は、労働者コミュニオンなど地域の労働運動のイニシヤティヴで成立し、労働者コミュニオンに加盟していたのであるが、後には、次第にそれぞれの組織の全国組織が成立し、その地域支部としての性格も持つようになる。従って、世紀転換期のエスキルストゥーナの労働運動の組織構造をおおまかに図示すれば、図1のように表せるであろう。

### 3. 団体生活の概要

スウェーデンの労働運動の団体生活は、労働運動が躍進期を迎え、メンバー数を増大させた1900年前後に、整った姿を見せるようになる。例えば、この時期に集会所である「人民の家」や公園である「人民の公園」が普及してくるのである。このように労働運動の団体生活が整備されてきた背景には、この時期に労働者の実質賃金が上昇し、労働時間が短縮していったことにより、労働者の余暇のあり方がクローズ・アップされてきたことがあったと思われる<sup>9)</sup>。

一方労働運動の団体生活は、禁酒運動や自由教会運動とほぼ共通した構成を持っていた<sup>10)</sup>。それは、これらの運動の密接な相互的な展開の中で、労働運動が、他の「国民運動」に大きな影響を受けていたことを物語るであろう。以下ではエスキルストゥーナにおける労働運動の団体生活を、集会、啓蒙・学習活動、娯楽活動、自助活動、その他に分けて、金属・機械労働者のそれを中心に概観することとする。

#### ① 集会

労働運動の団体生活の中心は、集会であった。ここで討議されて決定されたことに基づき組

8) E. Edenmark, *Eskilstuna arbetarekommun 1893-1943*, Eskilstuna 1943, s. 10-14, 21-28 ; Å. Lindström, *Metallfolk*, Eskilstuna 1990, s. 45-50.

9) 賃金の動向については、拙稿「労働者階級の形成」,130頁, 図2を, 労働時間については, T. Gårdlund, *Industrialismens samhälle*, Stockholm 1955, s.310-313 を参照。

10) M. Hellspong, *Korset, fanan och fotbollen*, s. 52. 禁酒運動の団体生活については、拙稿「禁酒運動」, 112-120頁を参照。

織が運営されたのである。集会は、職場クラブでは月1, 2回, 同程度の頻度で労組支部や労働者コミュニンで行われた。また、労働組合以外の諸組織, 例えば青少年クラブや婦人クラブなどでも同様に集会が開かれていた。その他, 争議や賃金交渉の時など, 状況に応じて臨時の集会が開かれた。例えば, 1909年の大ストライキ (storstrejk) の時には, 毎日のように「人民の公園」で集会が行われたと言う<sup>11)</sup>。

職場クラブなどでの集会の議論は, 組織の運営に関わることがやはり中心であり, 賃金交渉やストライキなどの活動状況, 上部組織或いは地域内外の他の労働組合との連絡事項の報告が行われ, メンバーの数々の提案を検討した上で, 集会, 講演, パーティ, メーカー, 上部組織の集会への代表派遣, 使用者との交渉委員会の選任, 職場でのアジテーションといった様々な活動の方針・計画が決定された。しかし, こうした組織の運営に直接関係することのみではなく, 労働組合運動全体や社会主義についてなど, より大きなレベルの議論や, 日常生活に関わることなど多様な議論が展開されたのである。クラブでは, 集会に際してメンバー1人を選び, 皆で議論するための議題を提供させたとも言われる<sup>12)</sup>。

こうしてクラブや支部で行われた多種多様な議論の例をアト・ランダムに挙げれば, 「クラブの面目を下げるようなメンバーに対し何をなすべきか」<sup>13)</sup>, 「政府の労働災害保険案は有益なものと思わせるのか」<sup>14)</sup>, 「前世期の歴史からどのような教訓が得られるのか」<sup>15)</sup>, 「我々はキリスト教洗礼に対しどのような態度を取るべきか」<sup>16)</sup>, 「フォークダンスは有益か」<sup>17)</sup>, 「婦人の社会的地位の向上について」<sup>18)</sup>等々である。

このようにして, 労働組合のメンバーは, 各自が自己の意見を展開し, プロトコールをつけ, 議事の進め方や組織の運営について学んでいったのである。旧来の「国民運動」研究が, 民主主義社会の運営に必要な技術, 価値観, 行動様式を身につける「市民の学校」としての「国民運動」に関心を集め, 団体生活の中でもとりわけこうした集会の教育的な機能に注目していった所以である。

ところで, このような集会をどこで行うのかが, 成立期の労働運動にとっては重大な問題であった。当時の労働運動は, 一般に社会的に白眼視される存在であって, 集会所を確保するこ

11) この, はぼ一カ月間続き30万人の労働者が巻き込まれた大規模な労使紛争の経緯については, B. Schiller, *Storstrejken*, Göteborg 1967 を, エスキルストーナでの展開については, *Berättelse över storstrejken i Eskilstuna*, Eskilstuna 1909 を参照。

12) A. Eriksson, a.a., s. 114-116.

13) *Munktells verkstadsklubbs mötesprotokoll* (以下 J.K. と略記) 24/3 1904 § 6.

14) J.K. 18/3 1900.

15) J.K. 4/2 1900 § 2.

16) *Järn- & Metallarbetareförbundets avd. 23s mötesprotokoll* (以下 J.A. と略記) 20/11 1901 § 1.

17) J.A. 18/1 1899 § 4.

18) J.A. 18/11 1903 § 9.

表-1 1905年におけるストックホルムの「人民の家」の利用状況  
(E. Key, *Folkbildningsarbetet*, Uppsala 1906, s. 183)

2,348 (回)	労働組合集会
528	ストライキ、ロックアウト集会
441	疾病基金集会
364	執行委員会議
351	禁酒集会
248	政治集会
83	コンサート・パーティ
76	討論会
72	協同組合集会
51	チェス大会
48	スポーツサークルの集会
307	その他 (ex. 宗教大会など)

⇒ 合計 4,917回の集会 (のべ429,160人の参加)

とが困難であったのである。エスキルストゥーナでは、当初、シェープマン通り (Köpmansgatan) の喫茶店や禁酒団体 IOGT の集会所「禁酒運動の家 (Ordenshus)」, 自由主義系の新聞社エスキルストゥーナ・キュリーレン (Eskilstuna Kuriren) 社の社屋などを借りてやっと集会を行っていた。そして、恒常的な自分達の集会所の獲得のための様々な努力がなされた末、1901年にフリーメーソン系の団体 (E & W) の建物を借りられることとなり、ついにそうした集会所「人民の家」を手に入れることができたのである<sup>19)</sup>。

この労働運動の集会所「人民の家」は、1892年マルメー (Malmö) で設立されたのが最初であった。語源は、ベルギーにおいて社会主義者の集会が行われた "Maison du Peuple" にあると言われ、初めて労働運動の集会所を「人民の家」と呼んだのは、当時マルメーを拠点に労働運動を指導していたダニエルソン (Axel Danielsson) だとされている<sup>20)</sup>。その後、労働運動の躍進と共に全国に普及し、1899年の段階では全国に20ヶ所以上存在し、15ヶ所で建設中であった<sup>21)</sup>。

これらの「人民の家」は、地域の労働運動のみの力で建てられたのではなく、しばしば勤労者協会 (arbetareförening) など自由主義諸団体の協力を受けていた。中には資本家の援助もあった。例えば、ストックホルムの「人民の家」は、1894年から建設の準備が進められ、1901年に 731人を収容するホールを備えたスウェーデン最大の「人民の家」としてオープンしたの

19) E.Edenmark, a.a., s. 58-59 ; E. Edenmark, *Minnesskrift. Folkets hus i Eskilstuna*, Eskilstuna 1943, s. 8-14.

20) C. Kassman, *Idéernes mötesplats*, Stockholm 1992, s. 14.

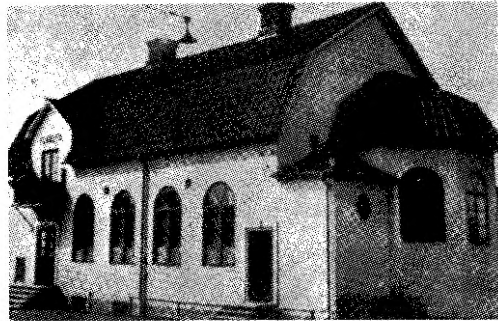
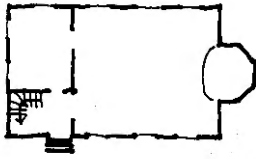
21) *Ibid.*, s.62. 1939年の時点では、「人民の家」は全国に516、「人民の公園」は250存在していた。  
*Svenska folkrörelser*, Del V, *Folkets hus och parker*, Stockholm 1939, s.545-550.

図-2 自由教会運動、禁酒運動、労働運動の集会所の例

(T. Almqvist/H. Johansson/L. Simonsson, *Vad folket byggde*. 2. uppl., Stockholm 1979, s. 89-91)

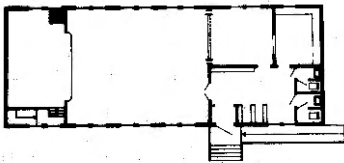
## 自由教会運動の集会所

イエヴレボリイ (Gävleborg) 県ボルネース (Bollnäs) のフィラデルフィア教会  
(Filadelfiakyrkan) [1926年建築]



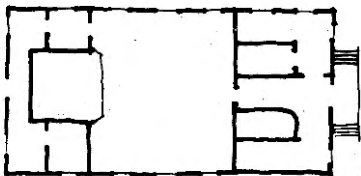
## 禁酒運動の集会所

ウップランド (Uppland) 県セーデルビイ・カッル (Söderby-Karl) の NTO (禁酒運動団体の一つ) の集会所 [1927年建築]



## 労働運動の集会所

コッパルベリイ (Kopparberg) 県ヴァンスブロー (Vansbro) の「人民の家」  
[1918年建築]





だが、その株主には、労働運動諸団体の他、禁酒団体、疾病・埋葬基金、協同組合が加わり、ビール醸造家が建設資金として多額の寄付をしたのである。これには、将来の顧客を確保することに加え、労働運動と禁酒運動の密接なつながりを牽制する目的があったという<sup>22)</sup>。

こうして設立された「人民の家」は、単に労働運動や労働者のための施設に留まらず、地域の住民のための文化の拠点となることを目指していた。実際、そこでは労働運動の活動のみではなく、禁酒団体の集会や講演などの学習活動や様々な団体による娯楽活動も行われていた<sup>23)</sup>。ストックホルムの「人民の家」の利用状況については、表1を見ていただきたい。

ところでエスキルストゥーナの場合には、「人民の家」は、フリーメーソン系の団体から建物を借りていたのだが、通常は、新たに建築されたものであった。そしてそれらは、概して大小の広間と台所から成る極めて簡素な建物であって、図2に見るように、禁酒運動の集会所である「禁酒運動の家 (ordenshus)」と様式を共有していた。内装も類似しており、ステージ(演壇)や木製ベンチの列、肖像画、旗などの配置にも共通性が存在した。ただし、「人民の家」では、「禁酒運動の家」よりもステージが発達し、より劇場に近い構造が見られたという<sup>24)</sup>。元来こうした集会所の形式は、1850、60年代にバプティストが設立した教会 (missionshus) に始まると言われる。バプティストは、国教会の権威的な建物を嫌い、周囲の農家と区別のつかない建物を建てたのである<sup>25)</sup>。

## ② 啓蒙・学習活動

労働運動の啓蒙・学習活動は、1912年の労働者教育連盟 (Arbetarnas bildningsförbund, 一般に ABF と呼ばれる) の成立によって本格的な展開を見せることとなるが、それ以前にも様々な活動が行われていたのであり、むしろ ABF の成立は、そうした活動の積み重ねの結果だとも言えるのである。ハンス・ラッシュンによれば、労働運動は当初からメンバーを教育する課題を抱えていた。労働者が、経済、政治生活の担い手となることが目指されていたのである。そのため、集会では、先に見たように様々なテーマで講義 (föreläsning) がなされ、議論が行われた。そして労働運動が本格的に展開をしだす1880年代には既に、議論クラブが設立

22) S. Hansson, *Folkets hus i Stockholm 1901-1926*, Stockholm 1926, s. 71-75 ; C. Kassman, a. a., s. 53-66, 88-92. 勤労者協会運動については、拙稿「1880年代前半におけるスウェーデンの自由主義と労働組合運動」『土地制度史学』, 第124号, 27頁を参照。

23) C. Kassman, a. a., s. 14-15. スtockホルムの「人民の家」の設立に際して、初代社会民主党首となったブランティンは、「この家は、それが如何に重要で正当なことであろうと、労働者の利害の促進のみを意図してはいない。それと同時に高度な道徳的理念を推し進め、人類の一般的発展のために役立つべきである。ここは常に自由な思想の足場となり、忌憚なくその考えを交える所となるべきである」と述べている。H. Branting, "Folkets hus' stora dag", 1901, i: H. Branting, *Tal och skrifter*, Del III, Stockholm 1927, s. 203.

24) M. Hellspong, *Korset, fanan och fotbollen*, s. 96-98.

25) Ibid., s. 86.

され、多くの労働組合が小さな図書館（図書室）を持つようになっていたのである<sup>26)</sup>。エスキルストゥーナでも、1919年にABFの支部ができるのだが、ABFによって行われることとなる活動は、それ以前から展開していた。

例えば、1909年のエスキルストゥーナ労働者コミュニンの活動報告書を見ると、その年には、労働者コミュニンによって、サンディカリズム、インド事情、アルコール問題、農業問題の他、成立して間もない1911年の選挙から下院に当たる国会第二院に男子普通選挙権を導入することを主内容とした新選挙法などについて20余りの講義が行われたことがわかる。こうした講義には、党や労組の中央組織から講師がやってくることもあったが、地元の新聞編集者や教師などを招いて行われる場合もあった。そして1910年の活動報告書によれば、新選挙法の実施を間近に控え、それに関連したテーマを中心に71もの講義が行われている。その前後は、どの年もほぼ30余りの講義が行われていた。この他、活動報告書には、労連支部や職場クラブでも講義が行われていたことが指摘されている<sup>27)</sup>。特に青少年クラブでは、毎年秋や冬に、一つのテーマをめぐって連続して講義が行われる講義コースが開かれていた。例えば、1905年の場合、そのテーマはスウェーデン語であった<sup>28)</sup>。

こうした労働運動の講義活動の他に、エスキルストゥーナでは、中間層が活動のイニシアティブを取った労働者協会 (arbetareinstitutet) が、講義活動を展開していたことに注目すべきである。労働運動では、そこに労働者が通うことが推奨され、実際に多くの労働者が通っていたと思われる。青少年クラブでは、こうした労働者協会の講義が存在しているのであるから、特別な講義コースは必要ないのではないかと議論されたのである<sup>29)</sup>。

また、学習サークルも存在していた。学習サークルは、今世紀初頭に禁酒運動 (IOGT) で成立した教育・学習形態であって、読書サークルを中心に、図書館活動、講義活動を有機的に結合し、従来のような受け身の学習ではなく、共通の関心を持ったものが集まり、自発的・積極的に読書・勉強を進めることを眼目としていた。エスキルストゥーナの最初の学習サークルは、1908年のIOGTのものであり、既に同年の青少年クラブの議論では、その設立が検討されている<sup>30)</sup>。しかし、実際に青少年クラブによって労働運動で初めて設立されたのは、1910年の

26) H. Larsson, *Tidenstecken*, Stockholm 1989, s. 30-34.

27) *Berättelse över Arbetarekommuns verksamhet*, manus., 1909. 職場クラブでの講義については、A. Eriksson, a.a., s. 116.

28) *Eskilstuna socialdemokratiska ungdomsklubbs mötesprotokoll* (以下 S.D.U.K. と略記) 12/12 1905 § 6.

29) S.D.U.K. 13/8 1912 § 6. エスキルストゥーナの労働者協会では、1910-11年度には、47講義、5コンサートが行われた。協会は2学期制で、学期を通じて受講を申し込むと1クローネ、1講義だけだと10エーレ、1コンサートにつき25エーレの受講料・入場料が必要であった。収入簿から逆算すると、学期単位で申し込んだ者が319人、1講義毎に申し込んだ者が延べ31800人、コンサートに訪れた者が379人であった。*Redogörelse för Eskilstuna arbetarinstututs verksamhet, läsår 1910-1911*, Eskilstuna 1911. 労働者協会運動については、前掲拙稿「自由主義」、29-30頁参照。

30) S.D.U.K. 31/1 1908. エスキルストゥーナにおける禁酒運動の学習サークルについては、拙稿

ことであった<sup>31)</sup>。各地での学習サークルの分布が初めて掲載された ABF の1915年の活動報告書によれば、1914年6月から1915年5月までにエスキルストーナで活動した学習サークルは、8つで、ストックホルム (Stockholm) の10、イエーテボリイ (Göteborg) の9に次いで全国で3番目にサークル数が多かった<sup>32)</sup>。その内訳は、青少年クラブ1、金属・機械労働者の職場クラブで結成されたもの5、木材加工労働者のもの1、婦人クラブ1であった。そのうち、トゥーナフォッシュ工場 (Tunafors fabrik) の金属・機械労働者の職場クラブのものだけは、そのテーマが職場クラブの組合史から分かり、それは、文学であった<sup>33)</sup>。

一方、1899年に労働者コミュニンの発案で、エスキルストーナの組織労働者が集まって様々な議論をすることを目的に、エスキルストーナ組織労働者議論クラブ (Eskilstuna organiserade arbetares diskussionsklubb) が設立されることとなる<sup>34)</sup>。設立会議の趣旨説明によれば、このように集まって議論することは、学のある労働運動 (skolade arbetarrörelsen) であることを示すのに有効な手段なのであった<sup>35)</sup>。この組織はまもなく解散し、活動は青少年クラブに引き継がれることとなった<sup>36)</sup>。

また、前述のように、各地で労働者図書館が設立されてゆく。ストックホルムでは、1891年に既に存在していた群小の労働組合の図書館を合併し、労働者が共同で利用するより整ったものとして、蔵書数 800冊を備えたストックホルム労働者図書館が成立した<sup>37)</sup>。エスキルストーナでも、労働者図書館が、労働者コミュニンのイニシャティヴで1895年に、後に「人民の家」が置かれた建物 (E&W) の一角に設立された。蔵書数は、設立時には 189冊、1901年には1032冊、1914年には6000冊と増加した<sup>38)</sup>。1908年の蔵書の内訳については、表2を参照されたい。

こうした労働者図書館が設立された背景には、勤労者協会など自由主義の諸運動の図書館には社会主義の文献はなく、19世紀半ばから設立され始めた公立の図書館 (教区図書館) の蔵書にはキリスト教関係の本が多く偏りがあり、しかもあまり充実しておらず、さらに労働者の余暇に開いていないという状況があった。それ故、労働者が、自分達のために自ら図書館の設立を目指すようになったのである。しかしラッションによれば、図書館設立に際して何より重要であったのは、図書館を労働者自身が設立し運営することによって、労働者階級が社会に対して責任を担う意志と能力を持つことを示すことであったという<sup>39)</sup>。そして「人民の家」と同様、

---

「禁酒運動」 116頁を参照。

31) S.D.U.K. 27/9 1910.

32) Arbetarnas Bildningsförbundet, *Verksamhets berättelse 1914-1915*, Stockholm 1915, s. 10

33) *50 år med Jernbolagets verkstadsklubb*, Eskilstuna 1950, s. 12.

34) *Eskilstuna arbetarekommuns mötesprotokoll* (以下A.K. と略記) 29/10 1899 § 9.

35) *Eskilstuna orbegåniserade arbetares diskussionsklubbs protokoll* 12/11 1899.

36) S.D.U.K. 10/3 1904 § 8.

37) H. Larsson, a.a., s. 23-28, 35.

38) N. Gunborg, *Bibliotek i Eskilstuna intill 1939*, Eskilstuna 1975, s. 44-45.

39) H. Larsson, a.a., s. 61-63.

表-2 1908年におけるエスキルストゥーナ労働者図書館の蔵書の分類(冊数と割合)

(Katalog för Eskilstuna arbetarebibliotek, Eskilstuna 1908より作成)

A. 自然科学	224 (6.25%)
1. 自然科学一般	29
2. 動物学	27
3. 植物学	17
4. 天文学	21
5. 物理学	19
6. 地理学	17
7. 化学	11
8. 電気・機械・技術	36
9. 医学・保健	47
B. 地誌・紀行文	290 (8.10%)
1. 一般地誌	36
2. スウェーデン及び北欧	51
3. その他のヨーロッパ	62
4. アジア・アフリカ	80
5. アメリカ	28
6. オーストラリア・南海	8
7. 北極・南極	25
C. 文化史・政治学・伝記	300 (8.37%)
1. 北欧史	100
2. 外国史一般	120
3. 伝記	26
D. 法律・社会・経済	292 (8.15%)
1. 法律及び憲法	12
2. 政治学・社会学説	34
3. スウェーデン政治	20
4. 平和思想・防衛問題	28
5. 経済学	44
6. 社会主義	30
7. 労働者問題	31
8. 女性問題(結婚・売春)	30
9. 小農創設・持ち家問題・協同組合	16
10. その他の社会問題	11
11. 教育・授業	39
12. 禁酒問題	25
E. 文学史・美術史・美学	94 (2.62%)
F. 宗教・哲学・倫理・心理	161 (4.49%)
1. 宗教・宗教学	84
2. 哲学・倫理・心理学	77
G. 文学・少年文学	2,200 (61.4%)
1. 小説(スウェーデン)	712
2. 小説(翻訳)	990
3. 詩と演劇	223
4. 他の北欧文学(原語)	31
5. 少年文学	188
6. サガ	36
H. その他	20 (0.56%)
合計	3,581

☆D-5 経済学:ヘンリー・ジョージ 4冊, プレンターノ 3冊, ヴイクセル 3冊他

☆D-6 社会主義:カウツキー 3冊, バルンシュタイン 2冊, ダニエルソン 2冊他

☆マルクス, エンゲルスの本は1冊もなし。

☆G-1 小説(スウェーデン):ストリンドベリイ 27冊, イエイエルスタム 17冊他

☆G-2 小説(翻訳):ゾラ 34冊, デュマ 29冊, ヴェルヌ 25冊他

労働者図書館は、労働者以外にも門戸を解放し、地域住民のための図書館として機能することを目指すことになる<sup>40)</sup>。

またエスキルストーナでは、教会の日曜学校に対抗して、青少年クラブの管轄の下に1905年に日曜学校が設立された。そこでは、物語り (sagostunder)、ゲーム、夏には遠足などの行事が行われた。それは、伝統的なキリスト教教育を行わずに児童の様々な能力を自由に伸ばすことを目的としており、社会主義を教えるものではなかった<sup>41)</sup>。

啓蒙・教育活動としてさらに言及すべきなのが、俗悪文学 (smutslitteratur) 反対運動である。今世紀に入り、スウェーデンでは書物の大衆化が急速に進んだ。それを端的に示すのが、タバコ屋などで25エーレ (1クローネ=100エーレ) で売られる通俗的な小説本であった。これは、主としてドイツの小説の翻訳であって、貧乏な娘が金持ちの男と結婚するといったたわいのないストーリーのものであった<sup>42)</sup>。こうした中で、青少年クラブの全国組織である社会民主主義青少年連盟 (Socialdemokratiska ungdomsförbundet) の1907年の大会は、このような書物に対する闘争を決議した。識字率が上昇したが、人々は俗悪な文学に染まっている。教養 (bildning) を推進し、これに対抗すべきであるというのである<sup>43)</sup>。社会民主党では、そうした本の販売規制を求めると共に、この頃ユース社 (Ljus förlag) やボニエッシュ社 (Boniers förlag) などが、特に古典とされる良書を安く普及する目的で出版し始めた、いわゆる1クローネ本 (後には25エーレ本も登場する) を支援することとなる。そして1908年の党大会では、党で出版社を設立することを決定した。こうして1912年に設立されたのが、現在まで続くティーンデン社 (Tidens förlag) である<sup>44)</sup>。エスキルストーナでも、こうした俗悪文学反対闘争は積極的に推進され、例えば1909年には、タバコ販売組合と労働者コミューン、青少年クラブの間で話し合いがもたれている<sup>45)</sup>。

このようにエスキルストーナの労働運動は、様々な啓蒙・学習活動を展開していた。その後1919年にABFの支部が出来ると、そこに労働者図書館の管轄が移され、ABFの支部の下に啓蒙・学習活動が組織されるようになる。例えば、1921年のABFエスキルストーナ支部の

---

40) P. Gustavsson/L. Rydquist/Å. Lundgren, *Mera ljus! Socialdemokratins kultursyn fram till andra världskriget*, Stockholm 1979, s. 160.

41) E. Edenmark, *Eskilstuna arbetarekommun 1893-1943*, s. 57.

42) H.Larsson, a.a., s. 88-90.

43) *Motioner till Socialdemokratiska ungdomsförbundets andra kongress i Stockholm*, Stockholm 1907, s.17-18 ; *Protokoll hållet vid Socialdemokratiska ungdomsförbundets andra ordinarie kongress i Stockholm den 19-22 maj 1907*, Stockholm 1907, s. 47-48.

44) P. Gustavsson/L. Rydquist/Å. Lundgren, a.a., s. 162-164.

45) *Protokoll fört över förhandlingar vid sammanträde tisdagen den 9 februari med den av Eskilstuna cigarhandelsförening, Eskilstuna arbetarekommun och Socialdemokratiska ungdomsklubben tillsatta kommittén för ordnandet av frågan : "Smutslitteraturens bekämpande"*, manus., 1909.

活動報告書によれば、この支部の下で1921年5月までの一年間に、46の講義が行われ（その他、労連支部や職場クラブで30余りの講義がなされている）、2回の講義コース、10回以上に及ぶ懇親会（samkväm）が開催された。そして450人が参加する27の学習サークルが活動していた<sup>46)</sup>。

### ③ 娯楽活動

地域の労働運動のそれぞれのレベルの組織では、しばしばパーティ(fest)、ダンス、遠足などが行われた。

エリクソンによれば、職場クラブでは、復活祭、ルシア祭やクリスマスといった年中行事に関連したもの他、度々パーティが行われたという。そもそも、多くの集会は、コーヒーを飲み、ダンスを踊り、歌を歌い、音楽を奏で、詩を朗読するなどパーティと一体となっていた。それ故、職場クラブでは、次の集会のためにコーヒーや娯楽を準備する委員会が選任されていたのである。また、夏には、一般にも公開された大規模なパーティが催されたという。そして夏は、早朝に森へ出掛けカッコーのなく声を聞いて村にもどってくるという伝統的な農村の慣行であったイエーコッタ(gäkotta)のシーズンでもあった<sup>47)</sup>。一方、リンドストリームによれば、労連支部(Avd.23)でも、こうしたパーティや遠足(lustresa)、イエーコッタが行われていた<sup>48)</sup>。また、労働者コミューンでも、プロトコールを見ると、パーティや遠足がしばしば企画されていたことがわかる。例えば、1896年においては、パーティを4回、遠足を4回行うことが決定されている<sup>49)</sup>。しかし、こうした様々なレベルの組織で企画されたパーティや遠足にどういった労働者がどれだけどのように参加していたのかは、今のところ分からない。

こうした娯楽活動に付随して、合唱団や音楽サークル、演劇サークルが存在していたこともプロトコールから窺える。例えば、労働者コミューンには、1894年のプロトコールに合唱団の記述が早くも見られる<sup>50)</sup>。それ故、この合唱団は、労働者コミューン成立早々から存在していた訳だが、1895年には早くも解散してしまう<sup>51)</sup>。しかし、1901年に当時鉄・金属労連の支部の一つであった機械工組合(Maskinarbetareföreningen)の合唱団の依頼で、新たに合唱団を結成することとなる<sup>52)</sup>。こうして設立されたのが、エスキルストゥーナ労働者合唱団(Eskilstuna

46) ABFs Eskilstunaavdelnings protokoll över års- och halvårsmöten 9/5 1921 § 4.

47) A. Eriksson, a.a., s. 114-120 ; Berättelse över E. A. Bergs verkstadsklubbs 50-åriga verksamhet, Eskilstuna 1949, s. 23 ; Berättelse över Munktells verkstadsklubbs 50-åriga verksamhet, Eskilstuna 1949, s. 43.

48) Å. Lindström, a.a., s. 32-33.

49) A.K. 24/2 § 10, 27/4 § 4, 2/6 § 15, 16/6 § 1, 4/7 § 1, 14/9 § 7, 9/11 § 8, 23/11 § 6 1896.

50) A.K. 12/10 1894 § 2.

51) A.K. 20/10 1895 § 6.

52) A.K. 27/10 1901 § 12.

arbetaresångförening)であった。また青少年クラブにも、合唱団が存在していた<sup>53)</sup>。このように様々なレベルの組織で合唱団が存在していたものと思われる。また、音楽サークル(楽隊)も労働者コミュニオンには存在し、毎週金曜日の夜に練習し<sup>54)</sup>、パーティなどでの演奏に備えていた<sup>55)</sup>。そして、青少年クラブには、演劇サークルもあり、火曜日の夜8時に「人民の家」で練習をしていた<sup>56)</sup>。青少年クラブは、大衆に良質な演劇を安価に供給することを目指す演劇団体「Skådebanan」を、その設立直後から支援することを決定している<sup>57)</sup>。

このように様々な娯楽活動が行われていたわけであるが、そうした娯楽の場として注目すべきなのが「人民の公園(Folkets park)」である。これは、元来「人民の家」と同様に、労働者のための集会所となるべく労働運動によって設立された公園であった。しかも、単に労働者の娯楽活動に使われるようになっただけではなく、そこで提供された娯楽は、様々な階層からなる地域住民をもひきつけたのである。それ故、「人民の公園」は、労働者の集会所としての機能を持つに留まらず、労働者を含め地域住民が家族と共に過ごして自然に親しみ娯楽を享受する場としての性格を強くしていったのである<sup>58)</sup>。

最初の「人民の公園」は、1893年に「人民の家」と同じくマルメーで設立された。そして当初は、マルメーがあるスウェーデン南部のスコーネ(Skåne)地方を中心に普及した。スコーネ以外で初めて設立されたのが、1898年に出来たエスキルストゥーナの「人民の公園」であった。その後も、マルメーを除き、大都市では発達せず、スウェーデン中部・北部の労働運動の強力な中小工業都市を中心に広まってゆく。これは、労働者に娯楽を供給するというその性格からいって、大都市では民間の娯楽産業と競合したためだと思われる。今世紀初頭には、全国で20余り存在していたという<sup>59)</sup>。

エスキルストゥーナの「人民の公園」には、ダンス場、運動場、劇場(屋根のない舞台)の他に軽食やコーヒーなどを出すレストラン(servering)が設けられ、ストライキやメーデーの集会、講演会が開かれただけではなく、演劇やダンス、歌・音楽、アクロバット、体操などが催され、近隣の住民を楽しませていた。これらの催し物は、地域の素人によっても行われたが、多くはそのためにストックホルムの芸人や旅回りの劇団などが呼ばれたのである<sup>60)</sup>。そうして上演された演劇には、シェークスピア、ストリンドベリイ、イプセンなどのシリアスな演

---

53) S.D.U.K. 29/4 1904 § 4.

54) A.K. 14/9 1896 § 8.

55) A.K. 20/7 1896 § 2.

56) S.D.U.K. 2/2 1909 § 8.

57) S.D.U.K. 22/11 1910 § 8.

58) S. Andersson, *Det organiserade folknöjet*, Lund 1987, s. 75-81.

59) Ibid., s. 82 ; A-M. Engel, *Teater i Folkets park 1905-1980*, Stockholm 1982, s. 52-55.

60) *Festschrift för minnesteckningar m. m. i anledning av Eskilstuna Folkets parks 25-årsjubileum den 10 juni 1923*, Eskilstuna 1923, s. 2-5.

劇もあれば、オペレッタ、アウグスト・パルム (August Palm) の作ったアジテーション劇、伝統的な民衆の芸能である農民喜劇 (bondekomik) など様々なものが存在した<sup>61)</sup>。

例えば、1905年5月に、古くから庶民によく知られた喜劇を得意とする典型的な旅回りの劇団であるシーグルド・サンドベリイ (Sigurd Sandberg) 劇団が公演し、一晚で3500人もの観客を集めた。この手の劇団で上演される演目は、庶民の身近な問題を題材とし、庶民を主人公とし、庶民を観客とした演劇なのであった。そのセリフには方言が使用されるなど、地方色も出された。また、この劇団の衣装はひどいもので、舞台装置も持たず、必要とあれば地元で素人を補充して公演を行ったという<sup>62)</sup>。

エスキルストーナには、1905年に設立された「人民の公園」の全国中央組織 (Folkparker-nas Centralorganisation) の本部が置かれた。エスキルストーナに中央組織が置かれた理由として、前述したように大都市では「人民の公園」が発達しなかったことやストックホルムに近くアーティストの手配がやり易かったことが挙げられるであろう。この中央組織の本来の目的は、各地の「人民の公園」の間でアーティストのやり繰りを行うことであったのである。しかしスコネの「人民の公園」では、演劇が盛んではなく、歌や音楽が中心であったのに対し、それ以外の地域では演劇が重視されたため、この中央組織にはスコネの「人民の公園」は加盟せず、別組織を設立することとなる<sup>63)</sup>。

#### ④ 自助活動

労連支部 (Avd.23) には、1890年の設立直後から疾病・埋葬基金が存在し、その後1900年に至るまでに失業基金、ストライキ基金、年金基金が整えられていった。しかし、それらの基金の運営は、1893年に労連と一人当たりの積み立て額をめぐって対立したように、次第に労連によって規制されるようになっていった<sup>64)</sup>。

一方、職場クラブ独自の自助基金も存在し、1899年にムンクテル工場で職場クラブが設立されたのだが、翌年には積み立て・貸し付け基金 (spar- och lånekassa) が設立されている。こうした組織の存在とは別に、病気と同僚のリストを作り、それを基にカンパを募るということも見られた<sup>65)</sup>。また、メンバーが失業した時には自発的に経済的な援助をしあうこともあったのである<sup>66)</sup>。

#### ⑤ その他

その他労働運動の団体生活として挙げるべきと思われるのは、1905年のフォルケット (Folket) 紙の創刊であろう。この新聞は、それまで労働運動の利害も代弁していた自由主義系のエスキルストーナ・キュリーレン紙と運動の間で、この当時頻発していたロックアウトやストライキをめぐって意見が対立したことを背景に、労働者コミュニティの下に社会民主主義系の独自の新聞として創刊されたものであった<sup>67)</sup>。今日でもエスキルストーナ・



キュリーレン紙と地域の二大新聞の座を保っている。

また、団体生活としては、様々な協同組合が労働運動によって設立されたことが重要であろう。例えば、人口急増のために労働者の住宅が不足していたのであるが、それに対処するため、労働者コミュニオン建築組合 (Arbetarekommuns byggnadsförening) が1895年に設立された<sup>68)</sup>。その他、消費協同組合 (Arbetarnas handelsbolag) が1899年に<sup>69)</sup>、協同組合のパン屋 (Koopertativa bageri) が1904年に設立されている<sup>70)</sup>。しかし、具体的な活動については、今の所、不明である。

以上のように、労働運動では様々な活動が展開し、労働者の日常生活の枠組を形作っていた。例えば、労働運動は団体生活が行われる独自の空間を形成したのであり、労働者は、「人民の家」、労働者図書館、「人民の公園」といった空間において余暇を過ごすこととなる。また労働運動は、独自の暦を持っていた。それは、イエーコッタ、ルシア祭、クリスマス・パーティといった農村の年中行事や伝統的な祝祭を継承したものに加え、月1、2回の集会、毎年のメーデー、労連や党の大会、ほぼ定期的に行われる選挙運動などといった労働運動の独自のサイクルからなっていた。さらに、主に成人前の青少年を対象とする青少年組織が存在し、誕生日が祝われ、メンバーの葬儀では、埋葬に参列したり、電報や花輪が送られていた。しかし禁酒運動では、「禁酒運動の家」で牧師を呼んで結婚式が行われたが、労働運動では、通常そうしたことは私事と見なされ、行われなかったという。とはいえ労働運動においても、このようにメンバーのライフサイクルに合わせた様々な行事が執り行われていたことは確かであろう<sup>71)</sup>。では次に、こうした独特な空間と時間の下に展開した労働運動の団体生活の特質を、幾つかの点から検討することとする。

61) J.Conny, … *en festplats kallad Folkets park*, Eskilstuna 1948, s. 11-57.

62) A-M. Engel, a.a., s. 55-58, 152-161 ; A-M. Engel, "Mellan masskultur och finkultur : folkparkernas teaterverksamhet 1905-1980", i: *Meddelande från Arbetarrörelsens arkiv och bibliotek*, Nr.22, 1982, s. 36-37.

63) S.Andersson, a.a., s. 87-92.

64) *Eskilstuna Järn och Metallarbetarefackföreningen. Några anteckningar om dess 60-åriga verksamhet*, Eskilstuna 1950, s. 28-29.

65) *Berättelse över Munktells verkstadsklubbs 50-åriga verksamhet*, s. 34-35.

66) A. Eriksson, a.a., s. 111.

67) E. Edenmark, *Eskilstuna arbetarekommun*, s. 54.

68) A.K. 27/9 1895 § 3.

69) A.K. 29/10 1899 § 10.

70) A.K. 18/12 1904 § 3.

71) M. Hellspong, *Korset, fanan och fotbollen*, s. 72-79; A. Eriksson, a.a., s. 129.

#### 4. 団体生活の特質

##### ① 様々な文化的要素の混合

労働運動の団体生活は、その独自の暦から見ても、様々な文化的要素の混合であったことがわかるであろう。農村の伝統的な年中行事に労働運動独自のイベントが付け加わっていたのである。「人民の公園」で行われた演劇を研究したエンゲルも、先述したように、それには労働者階級が独自に生み出したものは少なく、それが様々な文化的要素の寄せ集めであったことを強調する<sup>72)</sup>。しかし彼女は、そうしたことを認めたくて、団体生活で見られた演劇の文化的位置づけを試みている。

即ち、一方ではそれは、従来ごく限られた者が生産し消費していた市民文化をより広範な階層に普及したという側面を持っていた。しかし、その文化消費のあり方は、市民的公共性のものと随分と異なっていた。労働者は、演劇を芸術というより娯楽として捉え、普段着を着て、近所の者や家族、同僚と楽しんだのである<sup>73)</sup>。他方では、それは、伝統的な民衆文化 (folkkultur) を継承していた。民衆を主人公とし、身近な問題を題材とし、民衆を観客としていた古くからの演劇を、この団体生活の中でより発達させていったのである<sup>74)</sup>。その点でこの演劇は、大衆文化の先行者という位置にある。しかし、それは政治的・理念的な志向性を持ち、大衆文化の一面的な商業化に対抗しようとしていた。こうして、彼女は、市民文化と大衆文化の中間にある、双方とアンビヴァレントな関係を持つ存在として「人民の公園」で行われた演劇を捉えたのである<sup>75)</sup>。この位置づけは、労働運動の団体生活全体の文化的性格やその歴史的な位置づけを考える上でも参考になろう。

##### ② 日常生活の包括的統合

労働運動は、職場での活動の他に、様々な学習活動や娯楽活動を行い、メンバーの労働のみならず余暇を組織化していた。また、青少年組織や婦人組織を持ち、労働者の家族も組織しよ

72) A-M. Engel, *Teater i Folkets park*, s. 167.

73) Ibid., s. 166-167.

74) Ibid., s. 169-170.

75) Ibid., s. 170 ; A-M.Engel, "Mellan masskultur och finkultur", s. 40. 一方、第二帝制期ドイツの労働運動における演劇活動では、当時市民文化の中でも愛好されていた古典演劇や近代演劇の他に、政治的アジテーション演劇が主として上演されていた。V. Lidtke, *The Alternative Culture*, New York 1985, p. 148-158. プレーメンの労働運動の演劇活動については、西川正雄「社会主義運動と労働者文化」柴田三千雄他編『民衆文化』(シリーズ世界史への問い6)岩波書店 1990年を参照。しかし、スウェーデンの労働運動に見られた伝統的な民衆文化に起源を持ち、大衆演劇につながってゆくようなジャンルは見られなかったようである。それ故、こうした違いが何故生まれ、両国の労働運動文化の如何なる特質と結びついているのかは、今後の検討の課題となるであろう。

うとしていた。労働運動は、このようにメンバーの日常生活を包括的に統合していたのである。労働運動は、まさに「第二の家」となることを目指していたと言えよう。そしてこのことは、ほぼ同様の団体生活の構成を持つ、自由教会運動や禁酒運動といった「国民運動」にも当てはまるのである<sup>76)</sup>。

どうしてこのような労働運動や他の「国民運動」に多くの人々が参加し、それらが、今世紀初頭には人口の約3分の1が関わったと言われる大きな運動となっていたのかという問題に対して、ヘルスポングは、参加した人々にとってそれへの参加が如何なる意味を持ったのかという観点から接近している。それを彼は、価値合理性 (värderationell) と欲求合理性 (avsiktsrationell) という言葉で表している。前者によれば、人々は、運動のイデオロギーや目標に共鳴して運動に参加したのである。しかし、ヘルスポングは、実際に人々が参加したのは、後者のモメントの方が大きかったと考える。この欲求合理性とは、参加の動機が、様々な欲求を満たすことであったことを意味する。例えば、団体生活によって社会的帰属意識が得られるということ。「人民の家」がしばしば地域で唯一の集会所であって、参加によって社会的コンタクトの手段を得られること。メンバーとなれば様々な知識や情報が得られること。また、加盟すれば自助基金に入れるし、労働組合ならば賃上げや労働条件の改善といった様々な経済的利益も期待できること。さらに参加が、社会的上昇へのステップとなり得ること。といった動機である。ヘルスポングの言うように、このような欲求合理性に基づいて多くの人々が参加したとすれば、それは、「国民運動」の団体生活が、人間が社会で充足されるべき欲求の多くを満たしていたことを示していると思われる。労働運動を含め、「国民運動」は、いわば小社会を構成していたのである<sup>77)</sup>。

しかし、労働運動は、ただ単に労働者の生活を包括的に組織していたのではないことに注意すべきである。労働運動は、メンバーの考え方や行動に積極的に影響を与えようとしていたのである。例えば、飲酒の規制が、労働運動にとって重要な問題となっていた。ムンケテル工場の職場クラブでは、「職場での飲酒をなくすためにはどのような手段がとられるべきか」が議論されている。そこでは、まずそのような職場で酒を飲む労働者に対し警告を与え、それでも言うことを聞かなければ職場にその名を掲げ、最終的には使用者に彼を解雇するよう要求することが決定された。そうした者と一緒に働きたくないというのがその理由である。そして「我々の規約には、職場では当然各自に要求されるよう行動することが求められる。それ故、酒を飲まず (nykterhet), 秩序だって行動すること (ordentlighet) は当たり前なのである」と決議されたのであった<sup>78)</sup>。この他、この時期のエスキルストゥーナの労働運動では、数多くの飲

76) M. Hellspong, *Korset, fanan och fotbollen*, s. 76.

77) *Ibid.*, s. 129-134.

78) *J.K.* 24/3 1904 § 5.

酒をめぐる議論がなされている。例えば、職場クラブのメンバーは、集会には素面で出席することが求められ、それに反した場合には罰則が課せられることとなった<sup>79)</sup>。そして労連支部のパーティーは、蒸留酒なしで行われることが決まっている<sup>80)</sup>。また労働者コミュニオンでは、禁酒運動と協力して居酒屋の認可拡大を阻止する請願を行ったのである<sup>81)</sup>。

このように仕事の場における労働者のふるまいのみが問題にされたのではなく、余暇においても、労働者が如何に行動すべきかが重要な議論の対象となっていた。それ故、しばしば、労働者にとってふさわしい娯楽とは何かが議論されたのである<sup>82)</sup>。例えば一般に「人民の公園」では、酒を飲まず、上品に (städat), そして「リスペクタブルに (skötsamt)」ふるまうことが規則で定められていた。実際、そこには監視人 (vakter) が置かれ、公園での秩序取り締まりを行っていたのである。そしてそのシーズンの入場禁止がそれを犯した者に対する罰則であった。さらにこうした「人民の公園」の客は、地域の住民であり、互いに誰が誰であるか知っており、それが社会的なコントロールの役割を果たしていたとも言われる。このように「人民の公園」は、労働者の欲望・感情の発散の場であると同時に、それを規律化する場でもあったのである<sup>83)</sup>。

かくして労働運動の団体生活においては、余暇と労働が時間的にも空間的にも分離され、労働者のふるまいを双方において規律化しようとしていた。団体生活全体を通じて、労働者が「リスペクタブル」な労働者となることが目指されていたのである。そして、このような行動様式・生活様式は、筆者が以前に検討した禁酒運動の団体生活において追求されていたものと同質のものだと思われる<sup>84)</sup>。改めて、労働運動と禁酒運動との密接な関係が注目されよう。

ここで想起されるべきなのが、アンピョンソンの研究である。彼は、スウェーデン北部の製材所を中心とした町ホルムスンド (Holmsund) において、労働運動が禁酒運動と密接な関係をもって展開する中で、製材所の労働者や港湾労働者の間に「リスペクタブル (skötsam)」な労働者が出現し、労働運動や地域社会において台頭していった状況を分析した。そして、この「リスペクタブル」という概念によってスウェーデンの労働者文化の特質を捉えることを提

79) *Järnbolagets verkstadsklubbs mötesprotokoll* 7/1 1904 § 8 ; *J.K.* 28/3 1904 § 3.

80) *J.A.* 18/1 1899 § 4.

81) *A.K.* 22/1 1905 § 6.

82) *A.K.* 20/12 1896 § 4 ; *J.A.* 18/1 1905 § 8 ; *J.K.* 7/7 1903 § 3.

83) S. Andersson a.a., s. 159-161, 181-182. エスキルストゥーナの「人民の公園」でも、設立当初から各労働組合から選ばれた監視人が置かれていた。*A.K.* 19/7 1898 § 6. なお、労働運動がとりわけ秩序を重視したのは、デモや賃金闘争であった。メーデーのデモにおいては、それに参加する各団体で秩序管理係 (ordningsman) が選ばれ、整然とした行進が心掛けられたのである。*A.K.* 9/3 1896 § 13. また、1903年に行われた金属・機械工業でのロックアウトに際しては、職場クラブのレヴェルでもロックアウト中は酒を飲まないなど詳細な行動規則が定められている。*J.K.* 7/7 1903 § 4.

84) 拙稿「禁酒運動」、120-124頁。

85) R. Ambjörnsson, *Den skötsamme arbetare*, Stockholm 1988, s. 9. このアンピョンソン

起したのである<sup>86)</sup>。彼は、この "skötsam" という概念を、酒飲みではなく (nykterhet)、約束を守り (ordhällighet)、自己統御 (besinning) し、思慮深い (eftertänksamhet) という意味で用いている<sup>86)</sup>。こうした "skötsam" という概念は、恐らくエスキルストゥーナの労働者がかくあらんとしたのものにも当てはまると思われる。

また、こうした禁酒運動は自由教会運動の強い影響の下に成立したのであった。それ故、今後、そうした「リスペクタブル」な労働者といった人間類型と、バプティストやメソヂストに代表される自由教会運動、即ちスウェーデンにおける禁欲的プロテスタンティズムの展開との関連も追求されるべきであろう。かつて筆者は、禁酒運動組織の性格をM. ウェーバーの言う「ゼクテ」と捉えたのであり、アンビヨンソンも、「リスペクタブル」な労働者という人間類型と自由教会運動との関連性を指摘しているのである<sup>87)</sup>。

ところで、従来、「国民運動」の歴史的 성격及び意義についての支配的な見解は、ウプサラ大学の研究プロジェクトの総括における、ルンドクヴィストの評価であった。彼は、「国民運動」をその担い手であった下層中間層や労働者階級が社会の近代化・工業化にポジティブに対応したものと捉えた。即ち彼によれば、「国民運動」は、身分社会から階級社会への移行にあって、旧社会を破壊し、メンバーの新社会への適応を助け、その形成を促進するという進歩的な役割を果たしたのであった<sup>88)</sup>。そして、その大衆動員を通じて中間層の価値観が社会に浸透し、対決ではなく対話を好むスウェーデン社会と民主主義の調和的発展の基盤が形成されることとなる。つまり彼は、世紀転換期における「国民運動」の展開を、スウェーデンにおける合意に基づく政治やコーポラティズムの成功の歴史的な前提として捉えたのである<sup>89)</sup>。

このウプサラ大学の研究プロジェクトは、都市を対象にして地域研究を行ったのであるが、その後、農村における「国民運動」の研究が進み、それに対して批判が出されるようになった。例えば、ヴェステルボッテン (Västerbotten) の禁酒運動の研究を行ったフロンベリイによれば、農村に工業化・近代化の波が押し寄せ旧来の秩序が解体していったのだが、「国民運動」は、そうした動きに対抗し、旧秩序の擁護を目指した運動なのであった。旧来の農村においては、農民が醸造を行い、彼ら自身によって効果的に飲酒がコントロールされていた。しかし、1855年に原則的に自家醸造が禁止され、1864年に営業の自由が導入されると、外部から大量に資本主義的に生産されたワインやブレンヴィン (ジャガイモから作った蒸留酒) が持ち込まれるようになった。そのうえ、製材会社や製紙会社の土地買い占めがあり、農民は土地を失い、1862年に地方議会には収入や財産によって100等級にランクづけされた選挙権制度が導

---

の研究を契機としたスウェーデンにおける労働者文化研究の進展については、別稿を予定している。

86) Ibid., s. 9.

87) 拙稿「禁酒運動」, 134頁; R. Ambjörnsson, a.a., s. 236-237.

88) S. Lundkvist, *Folkrörelserna i det svenska samhället 1850-1920*, Uppsala 1977, s. 215-224.

89) Ibid., s. 195-198.

入されていたため、政治的影響力も失うこととなる。こうした状況の下で没落しつつあった農民にとって、資本主義とアルコールの害悪が一体のものに見なされるようになり、禁酒運動が生成したのであった。それ故、禁酒運動は、けっして進歩一般に敵対的ではなかったが、失われた秩序の代替物であり、旧来の文化を保持しようとするものであったのである<sup>90)</sup>。

こうした「国民運動」の歴史的な性格の見直しは、ある面ではヘルスポングを中心とした民族学研究の成果にも裏付けられている。これらの研究では、これまで見たように、団体生活がメンバーの日常生活を包括的に統合し、団体生活によって得られる社会的帰属意識がメンバーの参加には重要な要因であったことが強調されたのである。そして団体生活は、様々な文化的要素の混合物なのであり、しかも農村の年中行事を始め伝統的な民衆文化の諸要素も引き継いでいたことが指摘された。そうした点を含め、団体生活は、伝統的な農業社会から人々の日常生活を包括的に統合するコミュニティの性格を継承していたのである。また、それとは別に、労働者が本当にブルジョワ化されたのかどうかをめぐっては、様々な議論が展開されている<sup>91)</sup>。したがって、現在では、ルンドクヴィストのように旧社会の破壊や労働者階級を含めた社会への中間層の価値観の浸透ということを手軽には主張できなくなっていると言えるだろう。

しかし一方では、労働運動は、伝統的な民衆文化の諸要素を継承していたとは言え、余暇と労働の分離に見られるように、それとは質的に異なる「リスペクタブル」な労働者とそれが担う文化を生み出していた。これは、労働者が工業化に伴う社会の合理化・規律化に積極的かつ主体的に適応しようと努力する中で、市民文化との交流などを通じて形成されてきたものであると考えられる<sup>92)</sup>。それ故、労働運動の団体生活は、伝統的な民衆文化からの連続面と断絶面の双方から捉えられるべきであり、その性格については、農村と都市の差といった地域的多様性に配慮しつつ、こうした労働者の主体的な組織形成の過程で起こった文化的な融合の仕方から判断してゆくべきであろう。そしてそのような主体的な適応を可能とした背景として、スウェーデンにおける禁欲的プロテスタンティズムの展開を捉えてゆくべきだと思われるのである。

### ③ 団体生活の開放性

「人民の家」や「人民の公園」、図書館は、労働者や労働運動のためだけの空間ではなく、地域住民も利用した開放的な空間であった。「人民の家」の歴史を研究したカスマンによれば、

90) P. Frånberg, *Umeåsystemet*, Umeå 1983, s. 15-28, 225-227. エスキルストゥーナ近郊の農村における禁酒運動の展開を研究したヤンソンも、その運動が資本主義的發展に伴って成立した新たな経済的秩序に対する抗議である側面を持っていたことを指摘している。T. Jansson, "Folk vägg till logen", i: *Med eller mot strömmen?* Stockholm 1980, s.54-55; T. Jansson, *Samhällsförändring och sammanslutningsformer*, Uppsala 1982, s. 256.

91) こうした研究の動向については、先に触れた別稿で紹介することを予定している。

92) R. Ambjörnsson, a.a., s. 261. それ故、労働運動における市民文化的要素は、階級対立の存在と矛盾しない。

「人民の家」は、当初から敵対する者への攻撃のための基地として設立されたのではなく、解放区を形成し、その中で新たな社会の基本となる言論・集会の自由、平等のための活動の足場となることを目指し、労働組合や政党活動のみではなく、人間存在のための学習、教育活動、娯楽の場として成立したからであった。つまり、元来「人民の家」は、そのようにして地域の一つの文化的中心となることを志向していたというのである<sup>93)</sup>。

こうした労働運動の公共的空間の開放性は、同時期のドイツの労働運動のそれと比較して対照的である。リトケによれば、ドイツの社会民主主義労働運動は、帝政ドイツの支配文化に対してオルターナティブな文化を形成していた。即ち、既存の生産、社会関係、政治制度とは異なり、自由、平等、友愛といった価値観を実現しようとする、都市労働者の生活を包括的に統合した文化圏を形成していたのである。この点では、スウェーデンの労働運動と共通している。しかし、労働、結婚、家族、教育、リクリエーションなどを構成要素とするその文化圏は、様々な自発的結社 (Verein) によって組織されていたのだが、それらは概して、中間層の組織と分離していたのである。ドイツでは、こうした自発的結社への所属が社会の階層と対応しており、労働者階級、手工業者、小商品店主、ブルジョワジーでは、所属する団体が異なっていた。それ故、労働者の結社には、例えば、Arbeiter Turnverein というように、Arbeiter の名がついてそのアイデンティティの所在を示していたのである<sup>94)</sup>。さらに、労働者図書館 (Arbeiterbibliotheken) は、自由主義系の組織によって設立された国民図書館 (Volksbibliotheken) から労働者を守る目的で建てられたことも指摘されている<sup>95)</sup>。「労働者 (Arbeiter)」と「国民 (Volk)」の対立関係も見られたのである。

このようにドイツでは、労働者階級と中間層、社会民主主義と自由主義との関係は、スウェーデンとは異なり、疎遠かむしろ敵対的であった。藤田幸一郎氏の指摘するように、ドイツの労働運動は、第二帝政の下で市民的公共性への参加を排除された人々を結集して強固な閉鎖的世界を形成した。それにより、市民社会の只中に何人も否定し難いほどに強固な地位を築いていた。しかし、そうなればなるほど中間層の敵意あるいは不信の網の中で孤立を強いられていったのである。そうした「社会的統合」と「孤立」のジレンマに、ドイツの労働運動は苦しむこととなった<sup>96)</sup>。

このようにドイツの自発的結社のあり方は社会の階層序列と対応していたのであるが、スウェーデンでは、そうした階層と自発的結社の所属の対応関係は弱かったと思われる。例えば、1911年に設立されたヴェステルロース (Västerås) の労働運動の合唱団は、最初メーデーや

93) C. Kassman, a. a., s. 13-15. なお彼は、このような「人民の家」の成立を、スウェーデン社会民主主義の修正主義的性格と結びつけて考えている。

94) V. Lidtke, op. cit., p. 37-39.

95) Ibid., p. 184.

96) 藤田幸一郎『都市と市民社会—近代ドイツ都市史』青木書店 1988年, 301頁。

労組の集会で歌っていたが、すぐに地域の一般住民の生活の中に解け込み、新築のパーティや教会のコンサートで歌うようになった。このような労働組合のコーラスから地域のそれへという発展傾向は広く見られ、その中で、当初労働組合のみからメンバーを集めていたのが、それ以外にもメンバーシップを開放してゆく場合も見られたのである<sup>97)</sup>。

リトケはまた、そうした労働者の文化圏の凝集性を確保する要素として、国家や教会に対する敵意を挙げている<sup>98)</sup>。例えば、労働運動で歌われた歌のレパートリーは、労働運動歌が中心で、しかも愛国的・宗教的な歌は排除される傾向にあったのである<sup>99)</sup>。それに対し、1901年に発行されたスウェーデンの労働運動の歌集『社会主義歌集 (Socialist sångbok)』は、3つのクリスマス聖歌で終わっており、そこでは全体的に聖書の言葉が多く使われていた。また、1919年に発行された『現代歌集 (Tidens sångbok)』には、カール・エリック・フォシュルンド (Karl Erik Forsslund) の田園的・愛国的な歌が含まれていた<sup>100)</sup>。こうしたスウェーデンの労働運動で歌われた歌のドイツの場合に比しての特徴は、以前に指摘したスウェーデン社会民主主義の現行国家に対する親和性に関わっていると思われる<sup>101)</sup>。

さらにドイツにはない禁酒運動や自由教会運動とのメンバーの重なりや協力関係を考えると、スウェーデンの労働運動の団体生活の特徴として、公共的な開放性を上げることができよう。そして逆に、それらの運動との密接な関係の下に労働者階級が形成され、労働運動が展開したことが、こうした公共的な解放性が生じた一因となったと考えられる。

ちなみに、多くの労働者図書館は戦間期に、「人民の公園」は第二次大戦後、地方自治体であるコミュニンの所有に移され、名実ともに公共の施設となってゆく<sup>102)</sup>。例えば、ストックホルム労働者図書館は、1927年にストックホルム市に移譲され、市図書館が成立し現在に至っている。この時、ストックホルム市図書館は、労働者図書館を始め、民衆教育連盟 (Folkbildningsförbundet) の図書館など8つの自発的団体の図書館の合併により成立したのである<sup>103)</sup>。エスキルストーナでも、労働者図書館は、1925年に禁酒運動 (IOGT) の図書館と合併してエスキルストーナ国民図書館 (Eskilstuna folkbibliotek) となり、それが1930年に正式に市図書館となった<sup>104)</sup>。そしてエスキルストーナの「人民の公園」は、市の所有とはならなかつ

97) S. Bohman, *Arbetarkultur och kultiverade arbetare*, Stockholm 1985, s. 142-144.

98) V. Lidtke, op.cit., p. 200-201.

99) Ibid., p. 105-106.

100) S. Bohman, a.a., s. 84, 88-89. フォンシュルンドについては、拙稿「スウェーデン社会民主主義における教養理念の展開 (中)」(東京大学)『社会科学研究』第46巻, 第4号, 1995年2月刊行予定, 第三節3③を参照。

101) 拙稿「世紀転換期スウェーデン社会民主主義の思想的特質」(東京大学)『社会科学研究』第46巻, 第1号, 124-126頁。

102) 図書館については, P. Gustavsson/L. Rydquist/Å. Lundgren, a.a., s. 222-225. 「人民の公園」については, A-M. Engel, *Teater i Folkets park*, s. 131.

103) H. Larsson, a.a., s. 198.

104) N. Gunborg, a.a., s. 54-69.



たが、1973年に一般の人々を対象することをより明確とするために、「動物園公園 (Parken Zoo)」と改名して現在に至っている<sup>105)</sup>。今日のスウェーデンの公共的な施設の多くは、「国民運動」に起源を持つのである。

## 5. 結びにかえて

労働運動が、世紀転換期に、禁酒運動や自由教会運動と共にスウェーデンの民主化を担う「国民運動」として展開したことが、その団体生活に如何なる影響を与えたのだろうか。以上の検討から、それについて次の点を指摘することができるであろう。

まず第一に、労働運動の団体生活には、集会所の存在やその建築様式、あるいは学習サークルのように、他の「国民運動」に起源を持つものが多く存在したのみならず、労働運動は、これらの運動と活動の構成もほぼ等しくして、集会、啓蒙・学習活動、娯楽活動、自助活動等を行ってメンバーの日常生活を包括的に統合していたことである。これらのことは、労働運動がその活動を展開するに当たり、その形態や枠組に関して禁酒運動や自由教会運動から大きな影響を受けていたことを物語ると思われる。

そして第二に、労働運動は、ただ単に、労働者の日常生活を包括的に統合するばかりでなく、余暇と労働の区別に見るように、メンバーに生活全体において「リスペクタブル」な労働者たることを求め、そのような労働者を養成することを目指していたことが挙げられる。従来、「国民運動」は「市民の学校」であると主張されてきたのであるが、それは、単に集会に出席し自己の意見を表明して理性的に議論を展開することのみではなく、日常生活全体における行動様式に関わる問題なのであった。「議論する公衆」たることは、日常生活のあらゆる局面での「リスペクタブル」な行動様式に支えられていたのである。こうした価値観や、それに基づいて生活を組織化してゆくことは、まさに禁酒運動で見られたことであり、その起源は、禁欲的プロテスタンティズムに求められるであろう。それ故、このような団体生活の生成及び発達は、自由教会運動の勃興に至るスウェーデン社会における禁欲的プロテスタンティズムの歴史的展開と関連させて考えてゆかねばならないと思われる。

第三に、スウェーデンの労働運動に見られた公共的空間の開放性は、禁酒運動や自由教会運動との密接な関係に代表されるような、労働者階級と中間層（直接には、禁酒運動や自由教会運動の主要なメンバーである下層中間層）との多様な形態での交流を通じて生まれてきたと思われることである。そしてこうした交流を通して、様々な出自を持った労働者は、スウェーデンの近代化・工業化がもたらした社会の激変に積極的に対応しつつ、市民文化を受容しながら独自に自己の文化を形成していったのだと考えられるのである。それ故、禁酒運動や自由教会

---

105) E. Andersson, *På båda sidor om ridån*, Eskilstuna 1974, s. 99-101.

運動は、伝統的な民衆文化を継承していた労働者に市民文化を媒介する役割を果たしたのだと言えるだろう。一方、「リスペクタブル」な日常生活を実践する労働者は、このような開放的な公共的空間を背景に、自己が「議論する公衆」として社会に認知されることを積極的に求めてゆくようになる<sup>106)</sup>。このことは、労働運動が、禁酒運動や自由教会運動と様々な形で協力してスウェーデンの民主化を求めてゆくことを促したと考えられる。即ち、「国民運動」としての社会民主主義労働運動の展開が、こうした労働運動の団体生活の形成の前提となったと同時に、このような労働運動の団体生活が、労働運動の「国民運動」としての展開を支えていったのではないだろうか。

以上のように、労働運動の団体生活は、スウェーデンの労働者階級の形成過程あるいは労働運動の展開、さらには労働者階級そのものの特質を考える上で非常に重要な意味を持つのであり、今後さらにこれについて検討を進めてゆきたい。

(追記) エスキルストーナ文書館 (Eskilstuna stadsarkivet) では、ブロール・エリック・ウールソン (Bror-Erik Ohlsson) 氏とアニータ・ペテション (Anita Pettersson) 女史に、労働運動文書館 (Arbetarrörelsens arkiv) では、クラウス・ミスイェルド (Klaus Misgeld) 氏とカーリン・ベルゲンファルク (Karin Bergenfalk) 女史に、史料収集及び閲覧で多大な便宜をはかって頂いた。記して謝意を表したい。

---

106) 例えば、「国民運動」は、地域や国政レベルで活躍した多数の政治家を輩出してきたことが知られている。H. Johansson, a.a., s. 156-194.